――アジア現代女性史：翻訳シリーズ6――

『朝鮮半島の分断と離散家族』訳者あとがき

永谷ゆき子

本書は、金貴玉氏の著作『離散家族、「反共戦士」でも「アカ」でもない…　――離散家族問題を見る新しい視角』（韓国・歴史批評社、2004年）を訳出し、さらに日本での翻訳書刊行に向けて金貴玉氏が書き下ろした二つの章（本書の六章・八章）の邦訳を加えたものである。

著者金貴玉氏は1987年にソウル大学校を卒業した、いわゆる「386世代」（1960年代に生まれ、民主化闘争が激烈に展開した1980年代に学生生活を過ごした世代）に属する研究者である。国家保安法が厳然と存在する韓国にあって、朝鮮半島の南北分断・統一と平和という反共国家体制を刺激しかねない難しいテーマを果敢に追究してきた数少ない研究者の一人である。著者は、フィールドワークとオーラルヒストリーの手法によって記憶のなかに埋もれてきた資料を掘り起こし、越南民、ディアスポラ共同体、離散家族と女性といった南北分断を生きた人々の真実を解き明かしてきた。

本書は、従来政治的イデオロギーに左右されて実像が見えなくされていた離散家族に光をあて、真実を明らかにしようとするものである。本書の一貫したテーマは、「下からの反共イデオロギー崩し」にある。韓国の反共イデオロギーは、米軍政と韓国軍事政権を背景として歴史的に構築されてきた。著者は、反共イデオロギーの呪縛から真実を解き放つために、越南者の証言によって離散家族の実像を再現させ、「越南者＝反共の化身」に代表されるステレオタイプの認識を全面的に再検証し、そのような認識が政治的に捏造されたものであることを解明している。

本書は八章から成る。

第一章「離散家族研究の現況」では、韓国における離散家族に関する研究の流れが整理されている。日帝支配からの解放・南北分断の始まりから軍事独裁政権が続いた1945年～1980年代、ソ連の崩壊に始まる1990年代、そして2000年6・15南北首脳会談から現在までの三つの時期に分けて研究史が考察され、それぞれの時期が南北離散家族問題と離散家族自身にとってどのような時代であったのかが明示されている。

第二章「離散家族の範疇」では、離散家族とはどのような人々を指すのかを、さまざまな統計資料と文献資料を通じて整理している。従来、北側に拉致された者以外を離散家族と認めない韓国政府の立場が多くの越北者家族に真実を語れなくさせ、離散家族の実像を不可視化してきた。しかし2000年6月以降の離散家族の再会が転換点となり、離散家族自らが真実を語り始め、壁が突破されつつある。本章による具体的で立体的な整理によって、離散家族問題の広さと深さを了解することができる。

第三章「離散家族研究の方法論――口述史」では、著者が採ったオーラルヒストリーの方法論が説明され、1996年に筆者が行った越南者の村・東草（青湖洞、通称"アバイ村"）での半年にわたるフィールドワークの報告が行われている。東草に子ども勉強室のボランティア教師として住み込んだ筆者が住民の生活に参加し、時には痛い失敗もしながら積み重ねていく調査過程の報告は、まるでこのフィールドワークに同行しているような臨場感にあふれている。登場する越南者の老人たちの素顔も興味深い。

第四章「北側では離散家族問題をどのように認識してきたのか」は朝鮮民主主義人民共和国（以下、共和国と略称）の離散家族に対する認識と政策を扱うものである。「共和国は離散家族問題を軽視し、避けたがっ

ている」という固定観念＝偏見を脱し、歴史的な文献資料を精査して実体に接近しようとしている。韓国でもあまり知られておらず、なおさら日本においてはほとんど知られていない貴重な情報である。

第五章「われわれは反共戦士ではない――下からの反共イデオロギー崩し」では、「越南者はすべて筋金入りの反共主義者である」という韓国社会の越南者に対する既成通念を、五つに分類してていねいに再検討している。章の副題にあるように、それは上から作られた反共イデオロギーを下から崩していく過程である。韓国社会の越南者に対する既成通念の五つの類型は、日本社会にも共通するものかもしれない。

第六章「解放直後の越南者のソウル定着――越南者の社会・政治的活動を中心に」は、解放直後から朝鮮戦争勃発までの時期の越南者に関する研究であり、ソウルでの越南者の政治活動を資料や証言に基づいて詳細に描いている。民間テロ組織西北青年会と米軍政内の越南者出身の役人たちとの緊密な関係や米軍政が豊富な物資や超法規的特権を利用して越南青年を反共国家の暴力装置として動員していった真相が鮮やかに究明されている。

第七章「戦争と空間、人間の社会学的出会い――東草の越南者共同体を中心に」は、江原道東草を舞台として、朝鮮戦争と越南者がもたらした大きな変化を解明する。解放以降共和国に属していた東草は、朝鮮戦争によって米軍占領下に置かれ、また共和国から職と同郷者を求めた移住者（越南者）が集中したため、「咸鏡道出身の越南者の町」へと変貌した。東草には社会主義者が多かったため、人々が朝鮮戦争中に越北したり、米軍・国軍・反共青年団による大量虐殺が行われたという事実も明らかにされている。

第八章「朝鮮戦争と人々」では、最近のフィールドワークの成果をルポルタージュにまとめている。2006年第13次離散家族再会行事に同行して目撃した越北者の遺家族女性の話から始まり、朝鮮戦争時の国軍による住民虐殺を生き延びた東草のハルモニたちの物語、南韓が北側に送り込み続けてきた秘密工作員（北派工作員）の物語、その陰に隠された女性の受難、南韓の工作員によって拉致された共和国の漁民とその家族の話など、これまで歴史の闇のなかに封じ込められてきた人々、今日もなお真実を語ることができず苦しみ続けている人々の姿が克明に記録されている。

本書は、これら全八章を通じて離散家族問題の意味、その歴史的背景と現状、虚像の背後に隠されてきた実像を明らかにし、離散家族問題の解決を模索する。離散家族の実像がこれまで意図的に歪められたり隠されたりしてきたのに対して、著者は離散家族に関する膨大な資料・文献調査の裏づけの上に越南者共同体のなかでフィールドワークを積み重ね、越南者に寄り添った研究活動を行うことによって、人々の真実を生き生きと浮かび上がらせた。

本書には画一的な日本のマスメディアの報道からは決して得られない貴重な情報が集約されている。本書を読めば、離散家族問題や、いわゆる韓国の拉致問題について、私たちが普通に見聞きしている情報がいかに実像からかけ離れているのかを痛感させられる。

近年、日本と韓国のあいだでは「韓流ブーム」なども起こり、日韓交流の幅は確かに広がっている。しかし、日本が植民地支配によって朝鮮半島の南北分断の歴史的前提をつくり出し、第二次世界大戦後は米国・韓国と結びついて南北分断に加担してきたという基本的な歴史認識を欠いたまま、日韓の人々が真に互いを理解し合うことができるだろうか。膨大な南北離散家族を生み出した朝鮮戦争においても、日本は決して無関係でなかった。朝鮮戦争時代、日本にあった米軍基地がフル稼働し、旧日本軍から民間人までが米軍に加担・参戦した事実がある。そう考えると、朝鮮戦争が生み出した離散家族問題は日本の問題でもあるはずである。だが、日本の人々は今日までにどれだけ朝鮮戦争やそのために生み出された南北離散家族の問題を自分に引き寄せて考えようとしてきただろうか。韓国社会の深層に横たわる民族分断故の痛みと統一への希求について理解することなしに、真の相互理解がありえるだろうか。日本のなかには共和国への敵意を煽り在日コリアンに対して不当な攻撃もしかける勢力が存在し、メディアには「拉致国家」としての共和国像があふれている。かつて韓国の軍事政権によって「離散家族」は共和国に拉致された被害者家族に限定され、真実が覆

い隠されてきたが、今日の日本でもまた同じことが起こっているのではないだろうか。このような日本社会の現状に対して、南北離散家族の全体像を明らかにする本書は、南北分断の克服に対する韓国の人々の希求を深く理解するために、そして分断の固定化に加担してきた日本のあり方を問い直すために貴重な手がかりとなる。　日本に生きる私たちは南北離散家族と日本社会とのかかわりをどう考え、離散家族を生み出した朝鮮戦争と南北分断体制をどう認識し、その克服をいかに模索するか。本書は日本の読者たちにこうした重大な問いを投げかけている。著者は、日本語版序文の冒頭に「日本の読者たちと離散家族の問題をいっしょに話し合ってみたかった」と書いた。翻訳書刊行に関する打ち合わせのなかでもしばしば「日本で問題視されている『拉致』についての問題を朝鮮半島領域から説明しているので、日本の方々にも読んで頂ければうれしい」と語った。また、本文中で著者は日本における共和国に対する意識の険悪化に関連して、日本政府が共和国による拉致問題の真の解決のためではなく「このような雰囲気を、軍隊を保有するために『平和憲法』を廃棄し、軍備増強する方向に転換させていったという疑いを消すことができない」と述べた。このような意味でも朝鮮戦争と南北分断という問題は他国の問題では終わらない、日本に深くかかわる問題ではないだろうか。訳者は本書が日本で広く読まれ、多くの日本の人々と共にこの問いの答えを見つけたいと願っている。

最後に、翻訳の過程でお世話になった方々に御礼を申し上げます。著者の金貴玉氏、監修者の藤目ゆき氏はもとより、丁寧に訳文に目を通して下さった大阪大学教授の小野田求先生、常に温かい励ましを与えて下さる金京子さんをはじめとする先輩と友人たち、明石書店編集部のみなさん、そして家族にも、心から感謝します。

2007年11月

〈参考文献〉

金貴玉「北韓社会の女性の生活」『アジア現代女性史』創刊号、2005年。 金貴玉「朝鮮戦争時の韓国軍『慰安婦』制度について」『アジア現代女性史』第四号、2008年。